

## 新型コロナウイルス感染対策に考える

新型コロナウイルス感染の影響が深刻になっています。(執筆時点は2月25日です)

先般、神戸大学の岩田健太郎教授が、集団感染を引き起こしたクルーズ船の感染予防体制に問題提起して、船外への退去を要請された件には、色々と考えさせられる事があります。というのも、わたしは岩田教授の著書をいくつか読んでおり、その鋭い論説に共感していた読者のひとりだからです。

岩田教授はその著書『「患者様」が医療を壊す』（新潮選書 2010年）のなかで、執筆当時の新型インフルエンザ対策について次のように述べています。

官僚の多くは正義感が強く、義侠心に富み、まじめで誠実で責任感が強いです。そのことが仇になっています。「自分たちがやらなきゃ、誰がやる」というメンタリティーで多くの問題をしょいこんで、処理できずに苦悩しているのです。なんでそんなにしょいこむのかというと、「官僚は無責任だ、官僚は怠惰だ」とマスメディアが糾弾するからです。国民（医療者含む）もそれに乗っかるからです。でも、これはありもしない不当な非難です。官僚の問題は彼らが無責任で怠惰だからではありません。彼らが責任感が強く勤勉だからこそ（そしてその能力に過度に彼らが依存しているから）起きる問題なのです。僕らの甘え体質と官僚のまじめさ（プライドとも呼べるが）が見事に、しかも悪い形でマッチしてしまっているのです。(155頁)

10年前に書かれた本にもかかわらず、その通りのことが繰り返し行なわれているように思えてなりません。ここで重要なのは、今回の新型ウイルス感染で、政府や厚労省の水際対策にミスがあったということではなく、多くの国民が官僚に寄りかかり、少しでも問題があれば徹底的に「他責的」な振る舞いをとること、そして問題点を指摘される側もかたくなな態度をとることではないでしょうか。これでは、謙虚に人の意見を聞き入れ柔軟に路線を変更するという、本来あるべき対応が遠のいてしまいます。

政府チャーター機で中国から帰国して、検査を受けることを拒否して帰宅した人もいれば、地下鉄内で隣席の客がマスクをしないで咳き込んでいるというだけの理由で非常停止ボタンを押してしまう人もいます。いつからこのような小児的な振る舞いが横行するようになったか、人々は嘆いてみせますが、官僚や現場責任者に対し無闇に責任を追及する態度も小児的ではないかと、いま一步思いを致してみるべきではないかと思えます。

この小児病—岩田教授の言葉で言うと「甘え」—は、公共のサービスに対する一方的な受益者だという市場原理に、われわれがどっぷりと浸かり切っていることに起因するのではないのでしょうか。クレマーがあたかも市民意識の高い人間のように勘違いされるのも、消費者は神様だといまだに信じられているからなのだと思います。

さしあたり、政府の公表した「新型コロナウイルス感染症についての相談・受診の目安」を遵守し、感染拡大阻止をみずからの問題として引き受けることが、成熟した市民の有りようでしょう。「目安」に不備があれば柔軟に変更を加えれば良いことです。

## ■ 大震災の教訓をどう活かすか

感染症対策の話ではありませんが、阪神淡路大震災のときに、いち早く現地に医療チームを派遣した、神戸大学附属病院医師（当時）中井久夫さんの話を思い出しました。中井医師は地方の医師たちに救援の要請を行い、全国から多くの医師が駆けつけたのですが、神戸大学のスタッフが患者さんにかかりつきり、応援団になかなか交替のチャンスが、回ってきません。あまりに長い待機時間に小さな不満が上がりはじめたとき、中井医師はその医師たちに集まってもらい、「予備軍がいてくれるからこそ、われわれは余力を残さず、使いきることができる」と語りはじめました。そして「その場にいてくれる」という、ただそれだけのことが自分たちのチームにとってどれほどポジティブな意味をもつかを訴えたと言います。誰かがひとりで問題を背負い込むのではない体制ができるのだと。

感染阻止の前線で頑張っている医療関係者がいて、その周りにバックアップが整っており、新たな情報が入れば臨機応変に対応する。市民は新たな情報に一喜一憂することなく、ましてや誰かの責任を言い立てるのではなく、可能な限り専門家に協力する。そのことが現場のパフォーマンスを最大限に発揮させることになるのだと思います。

東日本大震災から2週間しか経っていない大阪大学の卒業式の際、哲学者の鷺田清一さんは、総長式辞の中で中井久夫医師の活動にも触れながら、次のように語りかけています。

市民社会、その公共的な生活においては、リーダーは固定していません。市民それぞれが社会のそれぞれの持ち場で全力投球しているのですから、だれもいつもリーダー役を引き受けられるとはかぎりません。だとすれば、それぞれが日頃の本務を果たしつつ、公共的な課題については、それぞれが前面に出たり背後に退いたりしながら、しかしいつも全体に目配りしている、そういうメンバーからなる集団こそ、真に強い集団だということになるでしょう。

この総長式辞は、市民のあり方、リーダーのあり方、フォロワーのあり方、それらを過つことなく導く「教養」というものに対する洞察に富んだ、極めて秀逸な講演でもあります。大阪大学のホームページから入手できますので、是非一読をお勧めします。

[http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/files/h23\\_shikiji.pdf](http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/files/h23_shikiji.pdf)

なお、この鷺田総長の式辞は、親交のあった梅棹忠夫の言葉を紹介し、こう結んでいます。「請われれば一差し舞える人物になれ」― 受益者、消費者にとどまらぬ市民たれ、という教えです。

（所長 瀬戸 英晴）